

# POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第33号 1996, 2, 16

発行

北海道ポーランド文化協会

〒060 札幌市中央区南2東2

河合楽器製作所北海道支社内

電話 011-231-8661

FAX 011-221-4936

## ポーランド時代のショパン エピソードとCDを聴くサロン

お話：北海道ポーランド文化協会会員・三浦 洋氏

ポーランドが生んだ音楽の天才、フリデリク・フランチシエク・ショパン(1810-49)はジェラソヴァ・ヴォーラに生まれ、ワルシャワで育ち、20歳のとき祖国を旅立ちました。

生き生きとした文章で書かれたショパンの手紙をはじめ、ポーランド語の一次資料をもとにして生い立ちのエピソードを年代順にお話するとともに、20歳までの作品のいくつかをCDで聴きます(例えば「レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ」やスケルツォ1番、ワルツ作品69-2など)。気楽なサロン形式でお話しますので、お気軽にご参加下さい。



日時：1996年3月8日(金)午後6時より  
会場：かでの2・7 510研修室  
(中央区北2条西7丁目 植物園前)  
入場無料

# おそまき『池田町紀行』

霜田 千代磨

(平成七年)

9月30日(土)午前9時、札幌駅集合。男5人女4人計9人、本間さんは夜6時過ぎ池田着の汽車にて合流される。午前9時53分の釧路行き特急おそまき3号に乗り車中の人となる。

新得あたりで昼弁当を食べる頃はすっかり和気あいあいになっていた。午後1時10分池田着、駅舎を出ると、藤平さんが白い帽子に白のトレーナーの上下を着て出迎えて下さる。なんでも、少年野球大会の開会式で挨拶しなければならぬので、皆さん「田園ホール」へ行って休息して下さい、との事であった。何しろ、天気は最高、空気は澄んでいる。後でわかった事だが、こんな良い天気を「十勝晴れ」と呼ぶのだそうだ。

「田園ホール」の立派さに一同唖然としている。入口には壁一面のステンドグラス、ホールの中には大きな舞台がある。

電動で収納できる階段式の椅子席等々。そして、建物の中には他に「カントリー講座」と呼ぶ織物教室

等が有り、タペストリの作品等が壁に張ってあった。

その夜はワイン祭りの前夜祭で「大通」と呼ばれる通りに露店やモギ店や夜店や、沢山の食べ物の屋台が出て賑わった。

ワイン無料飲み放題。焼きそばやら、おにぎりやらおでんを思い思いに頬張り満足した。

丁度、ニュージランドの高校生(交換で、短期間ホームステイしている。)連中も参加して、なかなかの盛り上がりだった。

ワインの樽転がしの競争もあった。モギ店の中に毛糸の帽子を売っている店があった。それは、「カントリー講座」の人達の作品であった。

3、4人がそこで、お互いに、似合う似合うと喜んで買った。灰谷さんがサッポロのポーランド人が帽子を買っているぞと笑っている。

我々が投宿したのが、とうきび畑を過ぎた処に有る「牧場の家」と呼ばれるコテージであった。

これがまた、なかなか良かった物だった。女は「ポニー」と名の

ついた一軒、そして男共6人は隣のコテージに投宿した。

以上で一日目の行動は終了した、といいたいところではあるが、その夜、御当地のお客様を迎えて、「深夜の酒宴」とあいなった次第である。流石、「北海道ポーランド文化協会」の名にし負う、修学旅行でした。

追伸

帰宅後、藤平さんへお礼の葉書を出した。御返事の文を載せて終わりとす。

前略

先日は大変ご苦勞様でした。とても良い天候に恵まれ、ゆっくりと過ごしていただけて、とてもよかったです。ありがとうございます。でもせっかく池田まで交流に来ていただいたので、人的な交流が不十分でしたので反省しています。現状ではしかたがないのですが、今後仲間を増やして行きたいと思っています。当地方に来られる時には是非一報下さい。

平成七年十月十一日 藤平 隆 敬具

雑句 バラン...

(札幌の友を迎えて)

ワイン祭空も心も十勝晴れ

藤平 隆

朝きりをすかして見ゆるワイン城

斎田 道子

ワイン晴れ城をめぐるて食の秋

小林 暁子

ワイン城内の煙にかすんでる

大和田 りえ子

朝霧の晴れて賑わう葡萄丘

栗原 成郎

ワイン城牛の煙にかすむ野趣

灰谷 慶三

光る丘今ここに在りワイン城

三浦 洋

ワイン城遊子遊行に酔いしれて

本間 富雄

十勝より日高の国へ秋の薫

園田 祐作

秋晴れにサングリオ飲む美女二人

栗原 とも子

十勝野の汽車の中まで秋のせて

霜田 千代磨

# 憧れの国ポーランドに留学して

安田 文子

ポーランドに留学して早くも一年半がすぎました。はじめて首都ワルシャワに着いた時は、ずっと憧れていたポーランドへ来ることができたことで感激しました。6歳の頃から遠藤道子先生にピアノのレッスンを受けさせていただいています。その合間に先生がお話しして下さるシヨパンにずっと耳を傾けていました。小学校三年生の時に初めて先生が「今度はシヨパンを弾きましょう」とおっしゃられて、変イ長調のワルツを課題にいただいた時のことは今でもはっきりと覚えています。シヨパンを弾けることが嬉しくて、一所懸命に練習したものでした。それからもノクターンやポロネーズ、バラード、スケルツォなど沢山の曲を先生に教えていただきました。私の中でシヨパンはずっと格別に好きな作曲家でした。大学へ進んでからもシヨパンを勉強したいと思っていましたので、ポーランド語を習い始め、大学を卒業してからカジミエシュ・ギエルジョード先生のもとでシヨパンを勉強できることになったときは感激もひとしおでした。ポーランド

に着いてすぐワルシャワ・シヨパン音楽院に入学し、留学生活が始まりました。私の住んでいる所はURSUSといってワルシャワの郊外ですが、春や夏になると木々も緑色に染まり大変美しいところです。ポーランド人の自宅にホームステイさせていただいています。ここでポーランド人の生活を感じ取ることがあります。とてもシンプルで自然な生活様式で貧しくても、どうエレガントに装い、上品に振る舞うかという姿勢を見ると、なによりも彼らはヨーロッパ人であるということを認識させられます。私がマズルカやポロネーズなどを練習している時は実際に踊ってみせてくれて、ポーランド人にとってこれらの踊りが身近なものであるということを感じます。

春から夏にかけては、ワジエンキ公園にあるヴァツワフ・シマノスキ作のシヨパンの像の下でシヨパンコンサートが開かれます。夏の青空の下でリラックスして聴くシヨパンはとても良いものです。そしてワルシャワから50km離れたところにあるジェラゾヴァ・ヴォーラにはシヨパ

ンの生家があります。ここでも毎週日曜日にコンサートが開かれ、風にそよぐレースのカーテンからもれてくるピアノの調べを屋外のベンチに座って楽しむことができます。

去年の夏、私はシャファルニアという所で演奏会をすることができました。シャファルニアは1842年にシヨパンが夏休みを過ごした場所でした。シヨパンが14才の時の初めての大旅行で、旅先で知ったポーランドの豊かな自然や人々の心のふれあいは終生忘れがたいものとなり、またポーランドの生の民謡や民俗音楽にじかに接することのできた貴重な体験でした。シヨパンはこの場所が大いに気に入って、翌年の夏にもまた訪れているほどでした。シャファルニアからシヨパンが書き送った手紙は満ちたりた気持ちなどを伝えています。シヨパンはまた「クリリエル・シャファルスキ」(シャファ



スタレ・ミヤスト(旧市街)にて

ルニア通信)という名の新聞を作って、旅先での経験を家族のもとに報告していました。そしてこの時、「小さなユダヤ人」と呼ばれるイ短調のマズルカを作曲しました。この場所でのマズルカを弾いた私は何ともいえず嬉しい気持ちでいっぱいでした。

これからもポーランドでシヨパンの勉強を続けていきたいと思えますが、私を導いて下さった遠藤道子先生にいつも感謝せずにはいられませ

1982年から第3回、第4回、第5回北海道シヨパンコンクールに出演し、奨励賞、銅賞、銀賞を受賞。  
1987年 東京芸術大附属高校入学  
1990年 東京芸大器楽科に入学  
1994年 ポーランド国立ワルシャワシヨパン音楽院に留学中

運営委員会より1995年12月27日(水)の運営委員会では主に次のようなことが話し合われました。

1. ショパンについての例会

1996年3月8日(金)18時からかでの2・7 510研修室で開くことに決定しました。講演者三浦洋さん。20才までのショパンについて未発表の作品にまつわるエピソードを中心にサロン形式でやりたいという希望です。

2. 創立10周年にむけての準備について

①メイン行事 1996年11月8日(金)かでの2・7で音楽会を開くことが決まりました。具体的な内容については次の運営委員会で検討することになりました。

②1997年に第二回のポーランドツアーを実施してはどうかという案が出されました。このことについては折にふれて検討していきます。参加したいと考えている方は今からその心づもりをしておいてはいかがでしょうか。

ポーランドめぐり

本の値段は、インフレより早いスピードで高くなった。一九九四年に比べると三五%高くなり、ポーランド人は、年平均一冊しか買わなかった。これは、紙代と印刷代が高くなったためである(紙は輸入品が多いため)。しかし、政府は今年七月、雑誌と新聞に使う紙の税金を取り消した。

(ポリテイカ

一九九五年十二月三十日号)



(ポーランドの人口)

昨年五月六日におこなわれた人口調査で、ポーランドの人口は、三八六二万人となった。そのうち、六二%の人が都会に住んでいる。

一九八八年から、七四〇万人増加。その増加の内訳は、都会で二・六%、田舎で〇・九%。男性千人に対し、女性一〇五七人である。男性の三十才台で三人に一人が独身で、結婚が遅くなって来ている。

学歴は、大学卒業者七%、高校卒業者二七%、中学校・専門学校卒業者二六%、小学校卒業者三四%、小学校を卒業していない人六・四%。

(ポリテイカ

一九九六年一月二十日号)

会費の納入を

お願いいたします

ポ文協の会計年度は十月一日から翌年の九月末日までです。新年度が始まりましたので、会費を納入して下さいますようお願いいたします。

会費の年額は、普通会员二、〇〇〇円、維持会員は一口五、〇〇〇円、団体会員は一口三〇、〇〇〇円となっています。

このPOLLEをお送りする封筒に同封したメモに、あなたの会費年額を記してあります。また、会費の滞納がある場合には、そのことも記してあります。

なお、会費の納入には、同封の振り替え用紙をご使用いただくと、送金手数料が掛かりません。

総会で一九九五〜六年度の事業計画と予算をお決めいただき、さらに創立十周年をめざして活動を広げようということになりましたが、財政基盤が無ければこれらの実施は不可能となります。どうかよろしく願います。

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・齋田道子

佐々木保子・安田誠子

〔連絡先〕621-1738 (齋田)

POLE 第 33 号(1996.2.16) 目次

〈第 26 回例会〉「ポーランド時代のショパン～エピソードと CD を聴くサロン」(三浦洋、1996.3.8)のお知らせ	1
霜田千代磨「おそまき池田町紀行」、藤平隆「池田町来訪のお礼」	2
安田文子「憧れの国ポーランドに留学して」	3
ポーランドあれこれ(「ポリティカ」誌より)	4